2022 親子で学ぶ平和学習資料

私の戦争体験

第44集

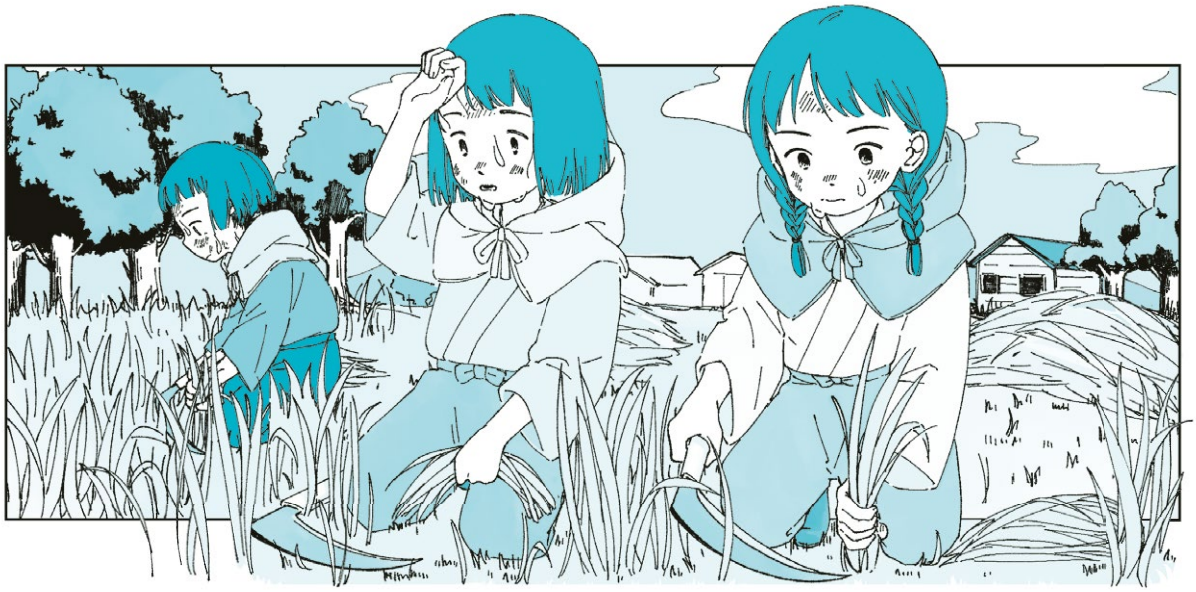
おじいさんや
おばあさんが
体験した
大切な大切な
お話の数々

巻頭特集「まんがで伝える大阪大空襲」── P2
「私の戦争体験アーカイブ」のご紹介 ── P4
二度と戦争はいけない
　―僕の祖母と戦争　宇澤 応雅 ── P5
なにもかも焼き尽くした戦争　西森 喜美 ── P8
三十年はおぼろにかすむ筆の跡　山形 幸嗣 ── P11
練乳と青酸カリ　堀内 久子 ── P14
原爆当時を偲ぶ　大森 規美子 ── P17
グラマンの機銃掃射に遭う　河野 直子 ── P20

くらしに笑顔お届けします
大阪いずみ市民生活協同組合

二度と戦争はいけない
―僕の祖母と戦争

和泉市　宇澤 応雅 13歳



昭和11年、僕の祖母は和泉市阪本町（旧和泉町坂本）に生まれ、昭和18年に**国民学校**に入学しました。新聞の紙面にはいつも、いたるところに「**撃ちてし止まん**」の文字があったそうです。

登下校の時は、みんな**防空頭巾**を肩にかけ、わら草履や下駄を履き、なんとランドセルは、段ボール紙を赤や黒に染めて縫い合わせただけのごく簡単なものでした。そのため、1学期の終わる頃には、もうほとんどの子は紐が切れて使えなくなり、2学期になると、端布を手縫いした手さげかばんを持って通学したそうです。

夏休みの宿題は草刈りをし、戦

国民学校
1941年、それまでの小学校が国民学校に改められた。子どもは、個人の子どもではなく、お国の子どもとして教育され、戦争につながる教育が行われた。

撃ちてし止まん
「敵を撃ち終えるまで戦いを止めない」という意味で、第二次世界大戦のとき、戦意高揚のスローガンとして多用された。

防空頭巾
戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。

地で使う馬の食料となる干し草を作って学校に持っていくことでした。草を学校へ持っていくと、ごほうびで草のにおいのする飴を、ひとり2個ずつもらいました。あまりおいしくはなかったそうですが、みんな喜んで食べたそうです。

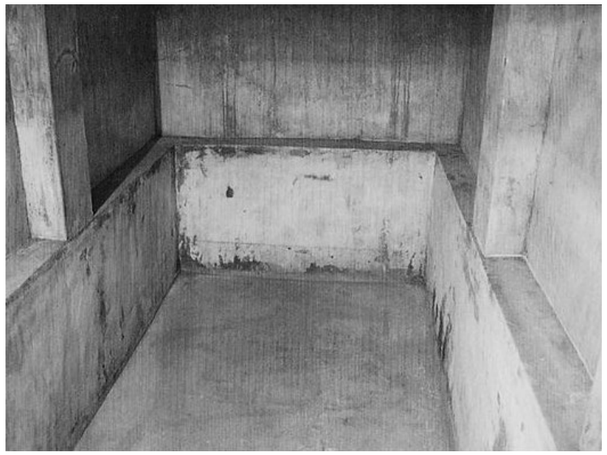
この頃になると、物資が不足してきて、戦争に使う製品に加工するために、寺の釣り鐘から家庭の鉄瓶・火箸まで、国が鉄製品を集めに来ました。また食料も不足し、少しでも空き地があるとサツマイモなどを植え、主食やおやつにしていました。甘いものはなく、農家の子どもはトマトやナスをおやつにしたそうです。

3年生のある日の学校の帰り、祖母は**機銃掃射**にあい、土手に伏せてやり過ごしました。祖母は比較的田舎の方に住んでいた（それこそ**疎開**しにくる人がいるほど）ので、このできごとにとてもびっくりしたそうです。

大阪大空襲の時には、**空襲警報**が解除された後、**防空壕**から外をのぞいた途端、遠くの空で何かがピカッと光って爆発し、さらに空から紙切れのようなものがヒラヒラと落ちてきたと言います。翌朝になって家から出ると、なんと畳1枚ほどの大きな鉄板が落ちていました。あのヒラヒラしたものの正体は、**焼夷弾**を包む板だったのです。幸い大きな被害はなかったそうですが、その時の恐怖は今でも、鮮明に焼きついていると言います。

そして戦争が終わり、戦地にいた兵隊さんが帰ってきました。祖母の従兄もそのひとりです。海軍に**出征**していたのですが、乗っていた船がアメリカ軍に撃沈されたため、無意識のうちに木につかまって海に浮いていたところ、アメリカ兵に助けられ、**捕虜**になっていました。音信もなく、家族は戦死したものとあきらめていたのですが、無事でした。ところが、兵士は国のために死ぬことが賞賛されていたので、捕虜になって生きて帰ったことを恥と思い、実家になかなか帰れなかったのです。そこでまず近所の家に泊まらせてもらい、次に実家に帰ったのですが、彼の予想に反して、家族は夢のように大喜びしてくれました。

多くの人の犠牲をもとに、また多くの人の命を奪う戦争。生き延びることすら、恥と考えた戦争。それは二度とあってはならないのです。その気持ちは、僕も祖母も同じです。



コンクリート製の地下防空壕（堺市堺区甲斐町東 山之口商店街内）
写真提供：ギャラリーいろはに

機銃掃射
機関銃の銃口を動かし、敵をなぎ払うように射撃すること。

疎開
攻撃目的となりやすい都市に住む学童、老人、女性などを分散させ、田舎に避難させること。

大阪大空襲
1945年3月13日深夜から翌日未明にかけて最初の大阪大空襲が行われ、その後、6月1日、6月7日、6月15日、6月26日、7月10日、7月24日、8月14日に空襲が行われた。これらの空襲で1万人以上の一般市民が死亡したと言われている。

空襲警報
敵軍航空機による空襲から避難を促すためにラジオやサイレンなどで知らせる警報。

防空壕
空からくる敵の攻撃に対し、避難するために掘ってつくった穴やみぞ。

焼夷弾
敵の建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使用された。

出征
軍隊に加わって戦地に行くこと。

捕虜
戦争や武力紛争に際し、敵軍に捕えられた者。

なにもかも焼き尽くした戦争

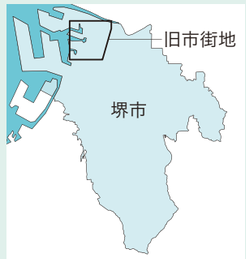
大阪狭山市　西森 喜美 93歳　（代筆 高橋 三佐子）

私は昭和4年1月28日、大阪の**堺市旧市街地**に4人姉弟の長女として生まれました。だんだん戦争の色が濃くなる頃、私は女学校に通っていました。2歳下の弟と学校の方向が同じで、家から近くの阪堺線までは一緒に歩いて行くのですが、そこを過ぎると弟は先に走って行きます。姉と一緒に歩いていても、女性と一緒に歩いているということでビンタを張られたからです。

女学校では2年生まで勉強していましたが、3年生になると戦争がひどくなり、勉強は午前中だけになりました。教室はつぶされ工場に変わり、兵隊さんの服のボタン付けをしました。教室ごとに毎日「責任額」を150着などと決められ、作業が早く終わると午前中でも帰してもらえました。ところが、喜んで帰ったら、翌日の責任額が上がり、次からは少しさぼり気味にしようとみんなで決めました。女学校は5年で卒業ですが、戦争が激しさを増し、4年生と5年生が一緒に卒業することになりました。

大阪に**空襲**が来るようになりましたが、堺に爆弾が落とされることはあまりありませんでした。しかし、毎日耳にタコができるくらい**警戒警報**が鳴ります。7月9日の夜、警戒警報が鳴りました。その日も大丈夫だと思って寝ていたら、夜中2時頃、家の前に**照明弾**が落ち、昼間のように明るくなりました。私は、「家にいたらあかん」と思って、母と一番下の6歳の妹を起こして逃げました。以前から女学校で「何か落ちたら風上に行け」と繰り返し言われていたので、大浜の方に逃げました。家を出る時、「もう、この家も見納めか」と思い、手を合わせてから逃げました。父は近くの借家に落ちた焼夷弾を消しに行きました。その後、父とは翌朝までばらばらで逃げました。私は、母と妹の手を引いて、3人で海の方に逃げました。50㎝くらいの長さの焼夷弾が、1m間隔で落ちてきました。途中、兵隊さんに会いました。私の住所を言って、「その辺りは焼けていますか？」と聞くと、「照明弾が落ちてから15分ほどで焼けた」と言われました。浜に着くとたくさんの人がいました。その時、妹の耳に焼夷弾の**黄燐**がくすぶっているのに母が気づき、あわてて消しました。

浜と反対の龍神駅の方では、低空の飛行機から機銃掃射されてたくさんの人が亡くなりまし



堺市旧市街地
現在の堺市堺区堺旧港～大小路通り周辺。

空襲
航空機から地上を爆撃したり、銃撃したりすること。

警戒警報
敵機の空襲のおそれがある場合に出された警報。

照明弾
夜間の戦闘で照明や信号に用いる弾丸。主としてマグネシウムを用い、数秒から数分光を発する。

黄燐
直接空気に触れると発火、燃焼し、有害な強い刺激臭のある煙霧を発生する。さらに熱により淡黄色のロウ状固体が液状となって燃え拡がる。

た。そちらに逃げていたら私たちは生きていなかったと思います。駅前の川には、周囲の熱さから逃れようと水の中に入った多くの人が死んでいたそうです。

家のあった所に戻ると、家はまる焼けでした。家がなくなると、こんなにみじめかと思いました。**学徒動員**先で腸チフスになって入院していた弟と、百舌鳥八幡に**学童疎開**していた下の弟も戻り、家族6人で、六畳一間の家を建て生活をしました。

戦争は、本当に何もかも焼き尽くしてしまう。今日生きていた友だちが、一瞬の爆撃で明日はいなくなってしまう。無残なものです。

大阪大空襲 花田口付近　写真提供：堺市

学徒動員
国内の労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されたこと。

学童疎開
1943年末ごろから、第二次世界大戦の戦局悪化に伴い、戦禍を避けるために大都市の学童を地方都市や農村に集団的または個人的に移住させたこと。

三十年は おぼろにかすむ筆の跡

羽曳野市　山形 幸嗣 57歳

以下は、亡き祖母（昭和63年没、行年77）が生前参加していた句会の企画文集（昭和51年8月発行）へ寄稿したものです（多少要約）。

5月18日（昭和51年）のことでした。

主人の月命日で、仏壇にお花を供え引き出しの掃除をしている時、普段触らない黒塗りの箱を出して開けてみました。古い経本などの上に何やら虫のついた半紙で包んだものがあります。「何だろう？もしや遺言では？」と思い、胸をどきどきしながら包みをほどくと一枚の古い色紙でした。

ところどころ虫に食われていますが、紛れもなく私の下手な筆跡

です。31年前に私が書いたものだとはっとしました。

「夫に捧ぐ

ひたすらに君のみさとし受け告がん

守り給へよ遺子の生ひたち」

それは昭和20年、**終戦**後のことです。

近所では**復員兵**が毎日のように帰ってきて、義父母や子どもたちは今日か明日かと夫の帰りを待ちかねていました。10歳の長男は「今晩門の戸を開けとこか。お父ちゃんが夜遅く帰ってくるかもしれん」とか、「お父ちゃんが帰ってから一緒に食べる」と乏しい食料の中から**配給**の缶詰を残したり、靴の足音が聞こえると「あっ、お父ちゃんや」と表へ飛んで出たりしていました。

ところが突然、**戦死公報**が来ました。

出征時から覚悟はしていても体中の力が抜け落ちました。お国のために年老いた両親と6人の幼な児を残して逝ってしまった夫の心中を思うと胸が詰まり、泣きながら子どもたちを抱きしめて、これからも強く正しく生きていこうと誓い合いました。

13歳を頭に出征前日に産まれた末子まで6人、下2人はまだ何も分からないけど上2人は目に涙をためて聞いていました。

村葬当日に、歌や俳句は知らない私でしたが、夫にさえ伝われば思うままを色紙に書いて仏壇の隅に供え、後日人目につかぬよう包んで箱にしまったものでした。

それを目にして、辛く悲しくいつ果てるともない思い出が走馬灯のように頭を駆け巡り、私は時の経つのも忘れて昔の夢を追っていました。

はっとして我に返ると、**三十三回忌**に当たる今年、夫の魂がこの色紙に引き合わせたのかと思いました。こんな下手な歌、人に見られては恥ずかしいから焼いてしまおうと思いつつ、そっと紙に包んで箱にしまい直しました。

今では子どもたちもみな片付きました。あの時の乳呑児も1児の父となり、みな元気です。

私は祖父母の長男（第2子。平成25年没、行年78）の息子です。孫の私が知るかぎりでは、祖父は昭和19年秋、3回目の出征時に**南方戦場**への輸送船ごと沈められました。戦死公報が来たのはその1年後です。同時に粗末な布袋に入った遺骨も届けられました。遺骨と言っても、得体の知れないただの石ころだったそうです。

昨年、納屋の片隅で偶然その布袋を私が見つけました。住職に相談し、叔父（祖父母の6人の子どものうち最後に亡くなった第4子）の三回忌・墓石建立式に合わせて、多くの孫・ひ孫に見守られながら当家の墓へ、76年越しで祖父の遺骨（石ころ）が埋葬されました。

石ころの入った布袋は、当初は祖母が仏壇の引き出しに入れていたのだと思います。

祖母の死後間もなく仏壇の改装があり、その際に父が古い経本他諸々とともに段ボール箱に入れて納屋に置きっ放しだったと思われます。

なぜ祖母も父も、お墓へ埋めなかったのか、あるいは捨てきれなかったのか、当事者でない孫の私にも推測はつきます…。

終戦
1945年8月15日、正午からのラジオ放送により、ポツダム宣言の受諾、日本の降伏が国民に公表され、太平洋戦争が終結した。

復員兵
戦時体制の兵役を解かれ、戻ってくること。

配給
数量が十分でない物資を家庭ごとにわりあてて配る制度。

戦死公報
戦死の通知。国から役場などを通じて届けられた。

出征
軍隊に加わって戦地に行くこと。

三十三回忌
満32年目の回忌(人の死後、年ごとにめぐってくる当月当日の忌日)。仏事供養を行う。

南方戦場
大日本帝国軍が第二次世界大戦で進攻していた東南アジア地域。

練乳と青酸カリ

堺市　堀内久子 92歳

その頃、私たち母子は、中国の**大連市**に住んでいた。

昭和20年8月15日、12時に重大ニュースがあるので必ず聞くようにということでラジオの前に座り込んだ。しかし雑音が多く、聞き取れない。「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び」だけわかった。一億国民最後のひとりまで戦えということなんでしょうと勝手に納得していた。後で日本の敗戦を知り、まさかという思いで容易に信じられなかった。それから4、5日して、**海軍武官賦**のA氏にお礼に行くからと、母と妹と3人で埠頭にあった海軍武官賦へ行った。もう戦争は終わったんだからスカートをはいていいのよね、と言いながら、母はスカートとブラウスを、私と妹は学校の制服を着て行った。すると武官賦の事務所にいきなりソ連の将校が入ってきて、私たちの目の前で日本の海軍将校の刀を取り上げ、襟章をむしり取った。A氏に「あなたたちはもう帰りなさい」と言われ、私たちは早々に引き上げた。

その日から、「女性は外へ出ないように」と言われ、路地の入口に**バリケード**を作り、男の人たちが交代で門番をしてくれることになった。買い物も**隣組**の男の人がみんなの注文を聞いて買ってきてくださる、昼の間はカーテンを閉め、夜になるとカーテンの隙間から外を眺めるという生活が続いた。女の人がいるという気配も知られてはいけないというので、灯りもつけず息をひそめていた。買い物に行ってくれる男の人の話では、ソ連兵にあうと「ダワイダワイ」と言って、まず腕時計を取られる、そして取った腕時計は、両腕にいっぱい、また両足にまで巻きつけて、動かなくなると「コワレタ」と言って、誰彼なしに道を歩いている人にあげるのだとか。

隣組の組長さんが「**配給**です」と言って、練乳2缶とおかしを少し、それと薬のように紙に包んだものを「お宅は女ばかり3人だから、いざというときにはこれを飲んで」と言って帰られた。後で聞くとそれは青酸カリで、青酸カリという劇薬が強力な死亡薬だなんて、その時初めて知った。学校から帰ったらかばんを放り出して、裏の若草山を戦争ごっこで走り回っていた妹が、家の中に缶づめ状態でいることにいつまで我慢できるかしらと思っていると、「練乳飲んで青酸カリ飲んで早く死のうよ」と言ってきた。「できるだけ節約して細く長く生きなくては」と

大連市
中国遼寧省の工業・港湾都市。遼東半島の南端に位置する。第二次世界大戦後、旅順と合併して旅大市となったが、1981年に再び大連と改称。

海軍武官賦
公務のために外国に駐在して、軍事に関する情報交換や情報収集を担当する武官のこと。

バリケード
市街戦などで、相手側の攻撃や侵入を防ぐため木材・土のうなどで急造した柵。

隣組
1940年に制度化された国民統制のための地域住民組織。5～10軒を一単位として部落会・町内会の下に設けられ、配給・供出・動員など行政機構の最末端組織としての役割を果たした。

配給
数量が十分でない物資を家庭ごとにわりあてて配る制度。

言うと、「私は太く短くていいの」と言う、そんな妹をなだめながら半年過ごした。

ようやく町なかも落ち着いて、昭和22年頃から大連からも**引き揚げ船**が出るようになった。

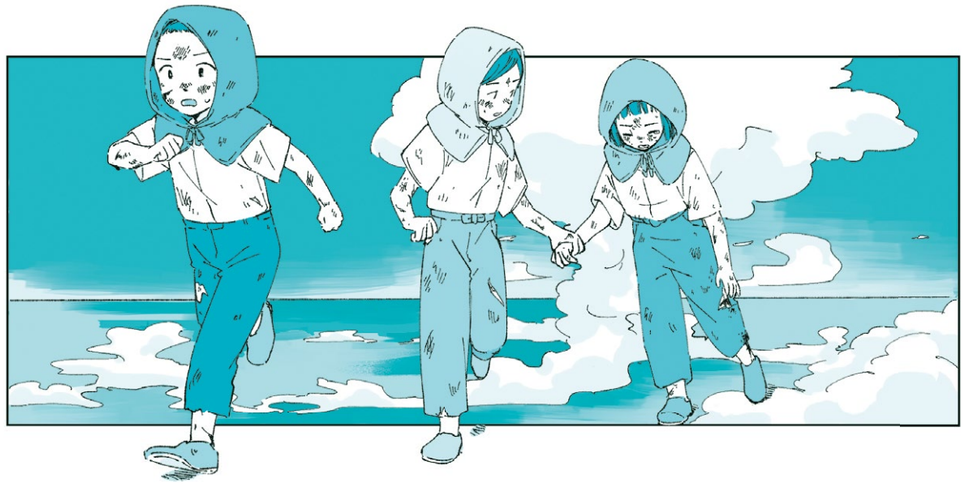
まだ帰らぬ兄のことを案じながら、引き揚げ船に乗った。汽笛が長く尾を引いて、船が港を離れてゆく、赤い夕陽とともに港が見えなくなった頃、母は肌身離さず持っていた青酸カリを、海に投じた。

港に待機する引き揚げ船群（舞鶴西港）
写真提供：舞鶴引揚記念館

引き揚げ船
外地にいた日本人が、日本の本土（内地）に帰る際に使用された船。当時660万人以上といわれる日本人が海外に残されており、1949年末までに、624万人が帰還した。

原爆当時を偲ぶ

広島市　大森 規美子（故人）



以下は、母が親しくおつきあいさせていただいていた大森さんが生前に書かれた体験文です。有田直子

8月6日は私にとって一生わすれることのできない日です。当時は夏休みもない時代でした。朝から太陽がさんさんと照りつけ、学生は**疎開作業**にいくことになっておりました。

広島市内の鶴見橋のところへ集合となっておりましたが（市内の学生全員がそれぞれに**建物疎開**や軍事関係の仕事）、急に校長先生がいったん学校に集合するように言われ、私はその方が近いので喜んでおりました。

学校に行き、まず校舎の掃除に行きました。それから現場に行くことになっておりました。学校は当時木造建築

原爆
原子爆弾のこと。ウラン、プルトニウムなど核分裂反応で発生する熱線・爆風・放射線で殺傷、破壊する爆弾。

広島に投下された原子爆弾「リトルボーイ」
米国国立公文書館所蔵
写真提供：広島平和記念資料館

疎開作業
建物疎開を行うこと。

建物疎開
空襲で火災が発生した際に、重要施設への延焼を防ぐために、その周りの建築物を撤去すること。

でした。

多分**警戒警報**だったと思います。8時15分、突然朱色の光でした。**焼夷弾**でも近くに落ちたなと思いましたが、ガタガタとゆれ、天井が落ちてきました。とっさに机の下にかくれました。その時は生きた心地はありません。

やっと音が収まりましたので、必死で、逃げなくてはと思い立ち上がり、天井等落ちたのをかきわけながら見ると、窓ガラスも粉々になって、窓ガラスの枠も斜めになっていました。廊下に出ると顔が血だらけになっている人、手や足をけがしている人もいました。私たちは素足で下に降りていきましたが、生徒たちは「お母さん」と泣きそうになっていました。自分の教室に行って救急袋（自分の荷物）を取り、先生も必死で校庭に集まるように言われ、靴を履こうと思って下駄箱のところに行けば、下駄箱も倒れており、自分の靴を一生懸命さがしました。やっと取り出して校庭に集合、もう不安でいっぱいでした。ここもあぶないと思われ、前の方にある山へ逃げるようにと先生から指示がありました。市内の方を見ると黒い煙で、そのうちに大やけどをし、顔も黒くなった人が逃げてきました。

私が山へ逃げた間に、母親が心配で探しに来たようです。母も体の三分の二はやけどしておりました。人に私のことを聞いて少し安心したようで、自分も疲れたのでしょう、座り込んでウトウトしたようです。はっと目が覚めると誰もいないので、ここで死んだらいけないと思い、その当時、非常時が起きた場合にと決められていた私の学校の近くの避難場所にいきました。市内の方向を見ると、あちらこちらから火が出て、家に帰れるような状態ではなかったのです。自分の家も焼かれました。

私は友人の田中さんのお兄さんのお友だちの所へ泊めていただきました。そこはお医者の家でしたが、陳列台も倒れ、ガラスケースなども壊れておりました。そこでお世話になりました。夜になり、市内が全域焼けてすべて停電になっておりましたが、外に出るとその火の灯りで明るい状態で、**防空壕**に出たり入ったりの一夜を過ごしました。せっかく逃げて帰ったのに、その夜に亡くなった方もいて、その身内の方からのすすり泣きの声が聞こえておりました。その夜は一睡もできず、だんだんと夜も明け、人々もざわざわするようになりました。

3日目、田中さんのお兄さんが私の父親を探してくださり、生きていると言われました。当時父親は**貯金局**（千田町）に勤務しておりました。一緒に行っていただき、父の元気な顔を見てほっとしましたが、着ていた白いシャツに血が大きくついておりましたのでびっくりしました。「これは人の血だ」と父は言いました。父親たちがいたのは大きなビルで、ガラスも厚かったのですが、そのガラスが壊れ、頸動脈にささり亡くなられたようです。周囲から火の粉が飛んでくるのでバケツで水をかけたりして、やっと焼けなかったそうです。何年か経って賞状だけもらったようです。家も焼け、帰るところがなかったので、地下室でしばらくいさせてもらいました。

あの1日が運命を変えました。でも私は幸い命を取りとめ、ありがたいことに今日にいたっております。全世界が平和でなくてはなりません。命は大切です。

警戒警報
敵機の空襲のおそれがある場合に出された警報。

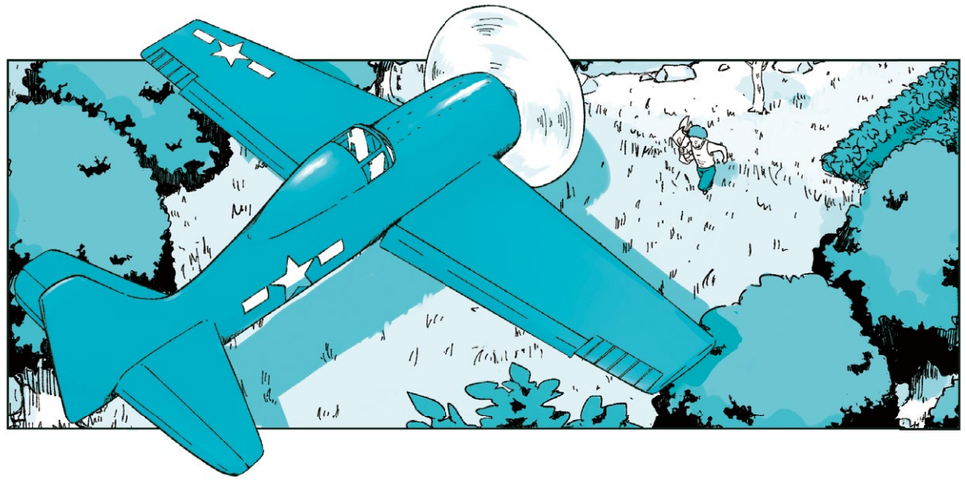
焼夷弾
敵の建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使用された。

防空壕
空からくる敵の攻撃に対し、避難するために掘ってつくった穴やみぞ。

貯金局
旧郵政省の内局の一つ。郵便為替・郵便貯金・郵便振替、年金・恩給の支給、各官庁の歳入出金の受け入れ・支払いなどに関する事務を取り扱った。

グラマンの機銃掃射に遭う

河内長野市　河野 直子 94歳



戦時下の若者には職業も居場所も選ぶ自由はなかった。

昭和20年8月はじめのこと、岡山の**軍服縫製工場**で体調を崩し、一時帰宅を許されて徳島の田舎の家にいた。空襲こそないが、食料も衣料もないない尽くし、長い戦争と暑さにみな疲れ切っていた。

そんな中でも、食料増産の国策に沿って、四国徳島を流れる大河**吉野川**の中州のさつまいも畑へ。近所の人と誘い合わせて3人で草取りに出かけた。3時間も過ぎた頃、いきなり西の高い山あいから湧いて出たような1機の**グラマン**が大音響でグワーンと機首を下げてくるではないか。

「グラマンや、早く」と一斉に転がり込んだ藪小屋をめがけたのか、バリバリバリバリと**機銃掃射**の音、「アアッ」とひと固まりになって祈るばかり。そこへ川下で草刈りをしていたおっちゃんが、木の枝にかけていた白シャツをつかむやいなや、大きく振りながら小屋をめがけて走ってくる。「シャツ放れ」と叫んでも聞こえるはずもない。おっちゃんが飛び込むなり、バリバリバリときた。

機首を少し上げた1機が川下に見えたとき、「あっ生きてた。みんな大丈夫」とわかったとたん、猛烈に腹が立ってきた。恐ろしさにぶるぶる震えながら、「おっちゃんなんでこのシャツ振り振り走ってくるんや。おっちゃんひとりが死ぬんと違う、みんな一緒に死ぬとこやったやろ。そばにあったら遠くへ放ってくるのが常識、そんなこともわからんの」と一気にまくし立てた。

ヘェヘェすんまへん、と言うばかりのおっちゃんに、横から隣の先輩が「おっちゃん、ここへ逃げて来たのを怒ってるんやないよ。誰でも命は惜しい、助かりたいのもみな同じ。この目印になるシャツをここやとばかり振り振り来たのがいかん言うてるんやで。低空で迫ってくるグラマンに向かって走るのは、撃ってくれいうてるのと同じ。逃げるんが間に合わんときは**畝**と畝の間にサッと寝て、いものつるを体に被せて動かんこっちゃ。動いたら撃たれるよ。覚えといてな」と言った。ヘェとしか答えないおっちゃんに「今日は恐ろしかったな。全員無事でよかったけど、こんなときとっさの判断が生死を分ける。充分気をつけてな」と言うと、おっちゃんは「ヘェすんまへん」と肩を落として帰った。

軍服縫製工場
当時、大日本帝国陸軍には被服廠（ひふくしょう）と呼ばれる軍服を製造する組織があった。

吉野川
四国の高知県と徳島県を流れる川。長さ194キロメートル。日本三大暴れ川の1つとして数えられ、通称四国三郎とも呼ばれる。

グラマン
アメリカ合衆国のグラマン社が開発しアメリカ海軍が第二次世界大戦中盤以降に使用した艦上戦闘機。

機銃掃射
機関銃の銃口を動かし、敵をなぎ払うように射撃すること。

畝
畑に作物を植えつけるため、間隔をおいて土を筋状に高く盛り上げた所。

何という落ち着き。あまりの恐ろしさに鬼のように怒った自分を反省し、「ついカンカンになって、すみません。言い過ぎたやろか」と言うと、「いやいや、命がかかってることやから。あんたが言わんかったら私が言うとる」と言ってくれたが、親ほどの年齢のおっちゃんをつかまえて、カンカンに怒った自分が嫌で嫌で、長いこと胸のしこりになった。と同時に、グラマンに追われる夢を見ては飛び起きたが、**終戦**とともにこれは消えて助かった。

戦争で得るものなんて何もない。命も、当たり前の日常もなくなる、どんなことがあろうと戦争だけは絶対になりませぬ。

2、3日後に聞こえてきたうわさによると、徳島から西へ、主だった駅を襲撃し、阿波池田方面からの帰りの駄賃に残り弾を使って脅したのではないか？ということだった。もし本気だったら、18歳の命は息絶えていたのです。若いときの自分の恥を忍んで書くことにしました。

食料の増産（和歌山県麻生津村で）阿倍野国民学校
写真提供：ピースおおさか

終戦
1945年8月15日、正午からのラジオ放送により、ポツダム宣言の受諾、日本の降伏が国民に公表され、太平洋戦争が終結した。